雪　　溪

六月のなかば過ぎ、新緑の山が描きたくて、久しぶりに層雲峡にでかけた。写生旅行の際、目的の山や湖などを描く適当な足場をみつける勘のようなものが、いつとはなく私の身についている。

この日もホテルの外側から、ここぞと思う窓に見当をつけて、その室を申しこんだ。幸いほかに予約がないというので、望みどおりにその室に案内してもらった。

私の勘に狂いはなかった。窓を枠として、黒岳、桂月凌雲などが美しい雪溪をかかげて、新緑の木々の上にそそりたっていた。私はあけ放った窓際に画架を構えて、さっそく写生にとりかかった。窓近くには老鶯が張のあるり声で、画布にもひびけと鳴きつづけた。

翌朝も素晴らしい快晴であった。雪溪は朝の陽によいよ輝き、早朝から画布に向う私の目を眩しました。無心に筆を運ぶ私の窓下あたりに、ふと人声が聞こえた。山容をカメラにおさめようと、下駄ばきで庭にまわった旅客たちであろう。東京弁らしい声関西弁らしい声。「素晴らしい雪溪ですね」「えこれがなかったら、この山もさっぱりですなあ」一つ宿に泊りあわせた、お客同士のゆきづりの会話である。たまたまこの季節に来あわせた本州からの人たちにも、写生旅行の私にも、雪溪こそは得がたい贈りものであった。

たとえ心無き者の仕業をもってしても、この美しい雪溪をごっそりはぎとりはすまいし、落書きで汚してしまうこともあるまい。私は雪溪を祝福しながら、描きつづけた。

一　木　万　寿　三

<一水会々員>